



大阪公立大学共同出版会

No.38

NEWSLETTER

ニュースレター

Osaka Municipal Universities Press (OMUP)

目 次

・新春に想う 「OMUPの志」ということ	足立 泰二	1	・新刊書の紹介	4
・自著を語る(27) 洛北 上高野 山端	中村 治	2	・新顔紹介	4
・自著を語る(28) 京都小塩山のギフトウ	八木 孝司	3	・大阪公立大学共同出版会事務局より	4
			・編集後記	4

新春に想う

「OMUPの志」ということ



OMUP 理事長
足立 泰二

「アメリカ・ファースト」が始まってから3年目を迎える。国際政治の混迷は米中の関税強化の応酬をきっかけに、今や経済(貿易)戦争の様相ともいえるほどである。さらに、今年に入って一段と、英・米など、国内世論の分断にも拍車がかかり、ますます不安定要因が増している。結果として、フェイクニュースに類する情報が飛び交うなど、残念ながら、グローバルな視野からすれば、「知性の減衰」は否めない状況と言えようか。そのような世情の中で、改めて我々の「OMUPの志」について思いを馳せてみた。

ところで、OMUPは20年近くになるが、設立後数年の任意団体時代を経て、それ以降は日本では唯一の特定非営利活動法人(NPO)大学学術出版会として、特異な実績を築いて来たと誇りたい。「出版=紙媒体での情報発信」は、決して自己満足の産物ではなく、次なるス

テップへのモチベーションで「OMUPの志」を明言するものと言えよう。これまで、私自身は現代を「科学文化・文明」時代と肯定的にとらえてきた。つまり、現代の科学技術と人間の営みは調和的社会受容あってこそ存続するものだとの認識、したがって、本は他のメディアと違って、「より体系性、網羅性、信頼性」あるものとして未来に期待できるものと信じてやまない。

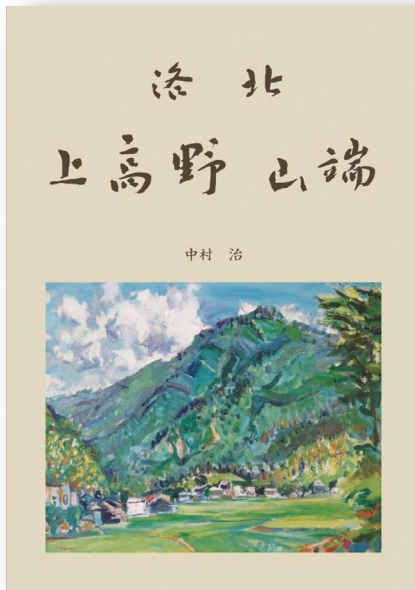
結論的には、やがて来るべきOMUPの創立20年の節目に向けて、大阪市立大学、大阪府立大学および両大学図書館(あるいは総合情報センター)などと共催する形で「今、大学で本を出すことの意味を問いなおす」(仮称)フォーラムを開催するのも一考ではないか。ここに、「近未来的OMUPの志」を問いたい。

洛北 上高野 山端

中村 治 著

A4判、並製本、58頁 1,200円＋税

ISBN978-4-907209-88-9 C1021



わたしは、京都の比叡山麓の岩倉という地域で生まれ育ち、今も住んでいます。娘が入学した岩倉北小学校の創立20周年記念事業として岩倉の地域誌を作成することになった時、その作成を依頼され、調べ始めたのがきっかけで、地域研究のおもしろさに気づくようになりました。もっとも、同じ地域ばかりを調べても、成果はあがりません。むしろ、遠回りのように思えても、近隣地域のことを調べると、その地域のことがよくわかるようになることがあります。わたしは2000年頃から、岩倉周辺の洛北と呼ばれる地域を調べ始めました。すると、戦時期の記憶を持つ人から、三菱重工業や日本国際航空工業関係の話をよく耳にしたのです。

もっとも、岩倉の幡枝八幡の馬場が拡張され、三菱重工業航空機エンジン試運転場が建設されようとしていたとか、岩倉病院が接収され、その工場の整地工事にあたる工員の宿舎にされていたとか、八瀬駅で飛行機用の燃料として松根油が製造されていたという話を聞いた時は、「なぜ飛行機関連の話が出て来るのだろう」と不思議に思ったものの、その疑問の解明に役立ちそうな書かれた史料はほとんどなく、それ以上調べることはありませんでした。しかし、修学院国民学校が三菱重工のプロペラの部品製造工場になっていたとか、旧住宅営団から三菱重工業が一乗寺青城町あたりの住宅70戸を、そして日本国際航空工業が一乗寺清水町の一画を購入したとか、高野の鐘紡の工場では飛行機の機体が造られていたという話を聞いた時、これらは単発的に起こったことではなく、相互に関連しており、背後に何か大きな力がはたらいていると思ったのです。しかしこれら

についても書かれた史料はほとんど残されていませんでした。修学院小学校の沿革史を調べればよいのではないかとされるかもしれませんが、しかし沿革史のうち、戦時中と戦後しばらくの部分がなぜか欠けているのです。

ところがその後、米国国立公文書館の日本占領関係資料に、洛北地域における三菱重工業の展開に関する文書が残されていることがわかったのです。修学院小学校は三菱重工業京都発動機製作所（第八製作所）の第31工場、八瀬駅は第61工場というように、工場名も記されていました。洛北地域が、戦闘機の大きな生産地にされようとしていたことを知った時は、驚きました。もう少し戦争が長引いていれば、洛北地域は空襲の対象になっていたのではないのでしょうか。自分たちが住んでいるところがどのような場所にされようとしているのか知らないまま生活していて、ある日突然、空襲を受け、家を焼かれ、命を落とす。そういうことが起こっても、不思議ではなかったのです。

戦時中に生活していた人でさえ当時のことをよく知らなかったのですから、戦後生まれの人が知っているはずありません。また、知ろうとしても、日本には史料が残されていなかったのです。しかし、わたしたちは「どういう道を歩んできたのか」を知っていなければ、「今どういう時代を生きているのか」を知ることができず、「これからどういう道を進んで行けばよいのか」を考える時に困ってしまうのではないのでしょうか。米国国立公文書館にとはいえ、史料が残されていたことを喜ぶとともに、戦争が終わるといち早く情報収集にとりかかった米国という国の奥の深さを思い知らされました。



京都小塩山のギフチョウ 八木 孝司

写真集

京都小塩山のギフチョウ

八木 孝司 著

A4横型判、上製本、32頁オールカラー

4,300円＋税

ISBN978-4-907209-94-0 C0045

これは京都市内に残された貴重なカタクリ群落保護地に、著者が15年近く通って撮影したギフチョウの写真集である。京都洛西の我家の裏山ともいえる小塩山（おしおやま：標高642 m）にカタクリの群落があると聞いたのは1990年頃であった。それを聞いて登ってみたけれども自分ではどこにあるのかわからなかった。1990年代終わり頃に、友人にしっかりと場所を尋ねて花の時期に登ってみると、頂上付近から四方へ下る谷筋はどれもカタクリの花で埋まっていた。ギフチョウの食草であるミヤコアオイもたくさんあり、ギフチョウが生息しているに違いないと思った。その後毎年カタクリ開花時期に小塩山に登っているうちにギフチョウを見つめることができた。私のチョウ友達の話をつなぎ合わせると、その頃ギフチョウは西山連峰の北から南へ、少なくとも大暑山、小塩山、杉谷、ポンポン山に生息していた。1999年頃から西山自然保護ネットワークの人たちによるカタクリ群生地保護活動が始まり、結果的にギフチョウも保護されることになった。そのおかげでカタクリもギフチョウも2010年頃にはずいぶん増えたが、その後どちらも急速に数を減らした。その原因はシカの食害である。現在はシカ防護ネットの内側でしかギフチョウは発生していないようである。防護ネットの外側には下草がほとんどなく、カタクリもミヤコアオイも非常に少ない。カタクリ群生地保護活動がなかったら、ギフチョウは絶滅していたことはまちがいない。京都東山や北山でかつてのギフチョウ生息地が消滅したことがそれを示している。京都市内でギフチョウが生息しているところは、おそらく小塩山以外にはないであろう。全国のギフチョウ生息地と同様に、この

小塩山の生息地は山頂部付近の狭い範囲に限られ個体数も多くない。生息地は人の手によってかろうじて保護されている。2017年の台風によって生息地の谷の1つで多くのコナラの木が倒れ、非常に明るい谷になってしまった。また2018年の京都市の夏は最高気温が37℃を超える日が23日もあった猛暑であった。秋にはさらに強大な台風21号が近畿地方を襲い甚大な被害をもたらした。これらのことがギフチョウの個体数減少に拍車をかけないか心配である。

私がデジタル一眼レフカメラを手に入れたのが2005年である。それからギフチョウの撮影を始め、もう15年近くになる。期間は長いようにみえるが、アマチュア週末カメラマンが、たった2週間しかないギフチョウ発生時期に小塩山へ登れるのは年に4日だけである。そのうち1回の週末が雨天になれば、その年の撮影は2日しかない。しかし2日連続の登山はきつい。さらに1回の登山で出会う撮影チャンスはほんの数回である。全くいい写真が撮れない年や小塩山に行けない年もあった。このような状況でも約15年のベスト写真を集めたらこのような写真集になった。人の手でまだかろうじて命をつないでいるギフチョウの美しい姿をぜひ見ていただきたい。この貴重な生息地が今後もずっと守られていくことを切に願う。また、小塩山の生息地の保全活動をされている西山自然保護ネットワークの人たちに敬意を表したい。



化粧品業界のブランド戦略

—日本と韓国における化粧品会社の戦略比較—
化粧品会社の戦略比較—

赤松 裕二 著

A5判、上製本、212頁
3,000円＋税

ISBN978-4-907209-92-6 C3063



和のランドスケープ

～美しい街づくりのための景観読本～

藤原 宣夫 編

増田 元邦 著

B5判、並製本、158頁
2,700円＋税

ISBN978-4-907209-89-6 C2051

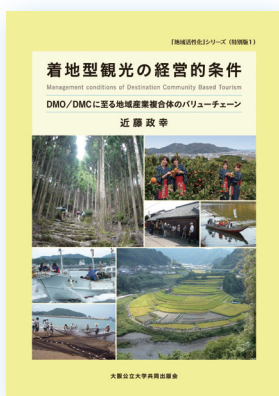


頭足類身体原論

中井 孝章 著

A5判、上製本、84頁
2,000円＋税

ISBN978-4-907209-91-9 C3011



「地域活性化」シリーズ（特別版1）

着地型観光の経営的条件

DMO/DMCに至る地域産業複合体のバリューチェーン

近藤 政幸 著

A5判、並製本、98頁
815円＋税

ISBN978-4-907209-87-2 C1033

OMUP編集 河村 俊彦



OMUPに参加して1年ちょっと経過しました。これまでは、カタログやチラシ、小説やエッセイのような本を主な対象としていて、学術書のようなものはあまりありませんでした。少々勝手のちがう

ところもあり、いまだに戸惑うところもあります。皆様には、いろいろご教示いただかないといけないこともあるかと思いますが、私なりに少しでもお役に立てるよう努力したいと思っていますので、どうぞよろしくお願いいたします。

大阪公立大学共同出版会事務局より

大阪公立大学共同出版会は、大阪市立大学および大阪府立大学における教職員と、本出版会の趣旨に賛同する者の自主的な参加によって成り立っているNPO法人です。本会は、研究・教育成果の発表を助成し、また民間出版社において採算上刊行を引き受けられないような優良学術図書の刊行頒布の事業を行い、学術の振興および文化の発展に寄与することを目的とし、次のような事業を行っています。

- (1) 会員の教科書および学術研究報告の刊行頒布
 - (2) 会員の学術図書の刊行頒布
 - (3) 会員のデータベース、ソフト等電子出版物の刊行頒布
 - (4) その他前条の目的を達成するために必要な事業
- 参加を希望される方は、下記事務局へお問い合わせください。

〒599-8531 大阪府堺市中央区学園町1-1

大阪府立大学中百舌鳥キャンパス内

NPO法人大阪公立大学共同出版会（OMUP）事務局

電話：072-251-6533 ファクシミリ：072-254-9539

e-mail：omup@hs.osakafu-u.ac.jp URL：http://www.omup.jp/

入会金：一口一万円（終身会費）

振込先：三菱東京UFJ銀行 中もず支店 普通3976510

編集後記

新年あけましておめでとうございます。

昨年は格別のご厚情を賜り、厚く御礼を申し上げます。

本年も皆様にご満足いただける本を作ることができるよう、精一杯努力する所存です。

皆様のご健勝を心よりお祈りいたします。

本年もどうぞよろしくお願いいたします。

（文責 児玉倫子）